

くちびるに歌を持って 心 に 太陽 を 持 て ー ⑦

額縁の上

小檜山博

絵 網中いづる

散歩の帰り、手羽先を焼いて食べるべく顔なじみでぼくの本も読んでくれている高木肉店へ寄った。勘定を払うときレジ横の壁の客からは見えな

い位置に金色の高価な額縁が掲げられ、なかに一〇〇〇円札が一枚飾ってあった。

ぼくが「商売繁盛を祈ってますか」と笑うと七九歳になる店主の高木さんは「ま、ちよつと聞いてくださいよ」とぼくを居間へきそつた。そこで話した。

「きのう店の隅に紙袋があつて、持ち主を知るため、なかをあけたら中身が入ったサイダー瓶が二本と白い封筒が入つて、封筒には『高木肉店様』

と書かれていたんです。差出人は『近所の老人』とだけ。それがこの手紙です」

高木さんが差し出した手紙を読みました。

「五〇年前です。うちの犬が高木肉店さんから小袋に入ったソーセージをくわえてきました。終戦間もなく私たち夫婦は貧乏のうえ小さい子が三人おり、毎日、二食を食べるのがやつとの生活でした。悪いと思ひながらソーセージを家族でおいしくいただきました。ですがその後、高木肉店さんの前を通るたびに胸が締めつけられ、心が痛みました。何度も謝りに行くこうと思いつつ勇氣がなく、五〇年たちました。長い年月でした。ほんと

うに遅くなって申しわけありません。おわびのしるしに、ちゃんとした値段はわかりませんがソーセージ代と私の大好物のサイダーをおくりします。お許しください。近所の老人より」

ぼくが読み終えると高木さんが「黙ってたって、どうってことないのに。そんなもの一つで五〇年も苦しみつづけたなんて、なんて人でしよう」と溜め息をついた。それからさらに「長いこと商売

してきて、いいことたくさんあったけど、この人のこと最高にうれしいです。サイダーはゆうべ家族みんなでいただきました」と笑みを浮かべた。

ぼくは居間から出ながら「人間で素晴らしいねえ」と言った。見ると二〇〇〇円が入った額縁の上に高木店主の字で『高木家お守り』と書かれてあった。



こひやま・はく 作家。1937年北海道生まれ。83年小説『光る女』で泉鏡花文学賞受賞。同作で北海道新聞文学賞受賞。97年札幌芸術賞受賞。2003年小説『光る大雪』で木山捷平文学賞受賞。05年北海道文化賞受賞。07年北海道功労賞受賞。11年鹿追町自治功労賞受賞。現在は、神田日勝記念美術館名誉館長、NPO法人北の映像ミュージアム館長、ゆうばり国際映画祭実行委員長などを務める。その他の著書に『小檜山博全集』『滯着』（柏繪舎）、『人生讃歌』（河出書房新社）など多数